

---

## Short story 5

伶俐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Short story 5

### 【Nコード】

N1675P

### 【作者名】

伶俐

### 【あらすじ】

イギリスの大学院に留学して2年。なんとかコースを修了することができ、帰国を目前に控えた香月沙夜<sup>こうづき しゃや</sup>。帰国とはすなわち別れを意味する。喧騒の中で、彼女の心は揺れる。秘めた思いの行く先は。

盛り上がるパブの片隅で、人知れずひっそりと深く息を吸い込んで吐き出した。

長い長いコースの終わり。半分以上、まだ信じられずにいる。

イギリスにやってきたのは2年前。

大学院で学ぼうと意気込んできたものの、これまで英語が特に得意でもなかったわたしは当然のように英語の壁にぶちあたった。

言いたいことがうまく言えなくて、内容を理解していても主張がでないために「理解で来ていない」と思われることも多く、理不尽な思いもたくさんした。

基礎レベルはほかのクラスメイトと変わらないはずだと思うのに、英語の理解が遅いために人よりも理解にかける時間が長くなり、ときにはどういうことを聞かれているのか、質問の意図を理解するのに長い時間が必要だったこともある。

そうして苦しみながらコースの終わりを迎えることができるのは、クラスメイトのおかげだと思う。

同じアジア圏からの留学生の女の子、わたしのつたない英語も理解してくれる地元イギリスの子、そして、同じ日本からの留学生。

「ほんとに今日で終わりなんだね。」

手元のビールグラスを弄びながら、隣に声をかけた。

「だね、なんか信じられないけど。」

応えたのは、行永拓斗<sup>ゆきながたくと</sup>。同じ日本からの留学生だ。

彼は父親の仕事の都合で幼いころにカナダに住んでいたことがあり、そのため英語はわたしよりもはるかにできる。

そのため、うまく理解できないときは彼に何度も意味を聞いたことがあった。  
はつきり言って、彼がこのコースにいなければわたしがコースを無事に終えるのは難しかっただろう。

周りに目を向けると、クラスメイトが陽気に踊っているのが目に入った。

その輪に入ることもちろんあるのだけれど、今日はなんとなくしんみりとしていたい気分だった。

いつもなら隣の彼、拓斗も必ず輪の中に入っているのだが、今日は珍しくじつとビールを飲んでいた。

拓斗はクラスメイトみんなから愛されていて、どんなときも誰からも必ず誘われる。

だから、普段はこうして日本人同士隣り合わせで座ることはほとんどないので、こうして二人で座っているのはなんだか不思議な気がした。

「沙夜さよはいつ発つのか？」

喧騒の中、隣で拓斗が聞いた。

「あと1週間くらいしたら発つつもり。拓斗は？」

「俺は1カ月くらいいるかな。ちょっと旅行してから帰るつもり。」

海外だからというのもあると思う。

普段は男性の名字ではなく名前を呼ぶのには抵抗があるのだけど、イギリスに来てからはみんなファーストネームで呼び合っているの  
で、彼のことは「拓斗」と呼んでいる。

ちなみにクラスメイトは彼のことを「タク」と呼んでいる。

「タクト」はどうも言いにくいらしい。

わたしはみんなからそのまま「サヤ」と呼ばれているが、発音しに

くいのかどうしても「サラ」に聞こえる。

だから拓斗に名前を呼ばれると自分が自分である感じがして懐かしいような嬉しい気分になる。

わたしが彼を「タク」と呼ばずに「拓斗」と呼ぶようにしているのは、そういう理由から来ている。

もちろん彼に言ったこともないし、ずいぶん自分勝手な理由だけだ。

「なんかさ、ほんといろいろあつたよね。」

思い返すといろんなことがあつて、自然と笑顔になる。

「いきなり拓斗に英語で話しかけられるしさ。」

「ああ、そうだったな。」

大学院最初のオリエンテーションで教室に着いたわたしは、なんとなく落ち着かない気分です。適当な椅子に腰かけ、オリエンテーションの資料を眺めていた。

そこに茶髪のアジア系の男の子が入ってきて、話しかけられたのだ。

『オリエンテーションの会場を探してるんだけど、ここで合ってる？』

アジア系の顔立ちにしてはほとんど癖のない英語を話すので、イギリスに住むアジア系のハーフの人なんだろうと思った。

『ええ、あつてると思いますよ。』

そう言うと、彼はほっとしたように笑ったのを覚えている。

そのまま彼はわたしの隣に座り、彼の専攻が自分と同じであること、彼はイギリスに来たばかりであることを知った。

『あのさ、じゃあ君はどここの国から来たの?』

そう彼から聞かれたので、当然のように

『日本から来たの。』  
というと、

『え、まじで?日本人?俺も日本人なんだけど。え、ってか日本語でいいじゃん。』

そういう彼に驚きつつ、気づかずに英語で話していた自分たちに爆笑したのだった。

日本人だからといって、それからいつも一緒にいたわけではない。彼には彼の友達ができて、わたしにはわたしの友達ができて、だから普段はもちろん別行動になった。

けれど、朝会うと日本語で「おはよう」って挨拶するし、帰りに「おつかれ」って言って手を振るし、

そういうちょっとしたやりとりにはいぶん救われていた。

ほんのたまに、時間ができるとどちらかの家で一緒に和食を作ったり、食べたり、

グループ課題がうまくいかないときは愚痴を言い合ったり、プレゼンで切羽詰まると「大丈夫?」って声をかけてくれたり。ほんとに、思い返すときりがない。

「タク、来なよ!」

店の奥、踊っているクラスメイトから彼に声がかかる。

「ほら、いっついでよ。」

言っと、彼はわたしを見て、一瞬心配そうな顔をした。

そのとき、Hey, come on, Taku! とさらに彼を呼ぶ声が聞こえた。

「ほら、大丈夫だから。」

ね、と安心させるように微笑むと、彼は軽くうなずいてクラスメイ  
トの輪へと向かった。

それがなんとなく眩しくて、少し寂しくなった。

彼が踊っているクラスメイトのもとへ向かったあと、わたしはほかのクラスメイトと話して回ることにした。

地元イギリスの子もいるけれど、わたしのような留学生も多く、それこそ世界各国からイギリスへと勉強に来ている。

卒業したあとは国に帰る子もいればイギリスに留まる人もいるけれど、どちらにしてもこれから簡単には会えなくなる。

もしかしたらこれから先ずっと会えなくなるかもしれない。

だからみんなの声と顔をずっと覚えておけるように、話しておこうと思った。

「サヤの住んでるところとタクの住んでるところって近いの？」

聞いてきたのはマリア。タイ人の女の子で、本名は難しくて発音できないので英語名を使っている。彼女がイギリスでのわたしの一番の友達だ。

「ううん、結構遠いんだよ。飛行機で2時間くらいはかかるかな。」

「えー、うそー。日本ってそんなに広いの？」

「いくら日本が狭いって言っても、みんなが思うよりはずっと広いよ。」

日本の国土がよほど狭いと思っっている人が多いらしく、飛行機で国内を移動するっている話をするたびに驚かれる。

「そっかー、じゃあおんなじ日本でもタクとはあんまり会えないってこと？」

「うん、そういうことだね。」

いつもこの話題になると、不思議な感覚に襲われる。今、イギリスにいて、毎日のように顔を合わせて挨拶して、同じように苦しんだり楽しんだりして。

それが日本に帰ったらほとんど会わなくなる。

同じ日本人で同じ国内にいれば物理的な距離は近いはずなのに、イギリスにいるよりもはるかに離れてしまうのだ。寂しくなるだろうな、と、ふと思った。

「タク、ガールフレンドが日本で待ってるんだよね。」

「そう言ってたよ。帰国したら結婚するのかもね。」

拓斗には日本に彼女がいる。イギリスに来た当初からその話は聞いていて、2年も遠距離恋愛をすることにずいぶん驚いた。

『よく彼女が待ってるって言ってくれたね』と、彼に言ったことがある。すると彼は

『俺もそう言ってくれるとは思わなくてさ、実は別れようって言っただよ。そしたらさ、彼女が、留学で離れるから別れたいっていうなら俺が帰ってくるまで待つから別れない、って言っただよ。』

そう言った表情が照れくさそうな嬉しそうな、そんな感じだったのを覚えている。

そう、そのことは最初から知っていたのに。

「マリアはどうするの?」

思考を切り替えるために話題をマリアのことに変える。

マリアにはこちらでできたイギリス人の彼氏がいる。  
マリアがタイに帰ると、彼女は遠距離恋愛をすることになる。

「一旦帰国するよ。家族の顔も見たいし。しばらくはお互いが休みの度に行ったり来たりするつもり。将来のことは、それからかな。二人とも気持ちが変わらなければ一緒になるし、そのときはわたしがイギリスに住むつもり。」

国籍の問題は、やっぱり大きい。

マリアは彼氏とたくさん二人の将来について話し合ったんだそうだし、きつとだからこそ彼女は前向きで明るくいられるんだろう。

マリアは急にわたしの近くに寄って、いたずらっ子のようにニヤリと笑ってわたしの肘でつついた。

「サヤ、帰国して素敵なボーイフレンドできたら連絡してよ。写真つきで！」

「・・・たぶん。」

「たぶんじゃなくて、絶対だからね。MUSTだから!!」

「Ok、そうする。」

「でもさあ、サヤ。」

「何?」

「イギリスで思い残すことない?」

「思い残すこと、ねえ・・・、」

そう言われて、ひとつ、頭に思い浮かんだことがある。

「ほら、こっちのジェントルマンに告白して将来日本に迎えに来てもらう約束をして、空港で涙のお別れをする、とかさあ。」

そんなマリアの答えに苦笑する。

「マリア、どこまで妄想してんのよ。それはマリアがやりたいこと  
でしょ。」

「あはは、そうなんだよねー。実はそんなのやってみたいんだよね  
ー。」

そう言ったマリアに苦笑を返す。

実はそれに近いことを考えていたわたしが内心ドキツとしたのは彼  
女には内緒だ。

わたしの想いは、誰も知らない。

## 2 (後書き)

読みやすいように少し間隔をあけてみました。

「ね、サヤ、写真撮ろう！」

マリアの言葉にうなずいて、自分のカメラをバッグから取り出す。

「はい、撮るよー。」

マリアがわたしのカメラを持ってなるべく自分の体から遠くに離して、わたしたちふたりが入るように角度を調整する。

かしゃ、とフラッシュが光り、写真がちゃんと撮れたのをモニターで確認したあと今度はマリアのカメラで写真を撮る。

それから周りのクラスメイトを巻き込んで、ひたすらみんなと一緒に写真を撮った。

「あ、拓斗。一緒に写真撮ろう。」

いつの間にか写真撮影の輪に加わっていた拓斗に声をかける。

「ああ、いいよ。」

実は誘うのには勇気が要った。

了承してくれたことにほっとして別のクラスメイトに自分のカメラを渡すと、拓斗も自分のカメラを同じように渡した。

「はい、じゃ、もうちょっとふたり近づいてー。」

カメラマンになってくれたクラスメイトがわたしのカメラを構えて言う。

その言葉に、拓斗がわたしに近づいて、肩に手を回してきゅっと引き寄せた。

どくり、鼓動が鳴る。

肩を組むなんて普通のこと、そう自分に言い聞かせて冷静になろうとする。

「はい、撮るよー。3、2、1・・・」

すっと、拓斗が顔を寄せ、頬が触れ合いそんな距離に近づく。

息が、止まる。

パシャ、とフラッシュが光り、近づいた距離が一瞬で離れていった。止まっていた呼吸が再開し、一気に全身に血液がめぐる。

けれど肩に回された手はまだそのまま、離れる気配がない。

嬉しい半面わたしのとんでもなく早い鼓動が肩から伝わってしまうんじゃないかと緊張で身が固くなっていく。

「じゃあ今度こっちのカメラね。」

と、クラスメイトの言葉でまだ拓斗のカメラがあるのを思い出した。そうか、それで手がそのままなんだ、と納得して少し体から力が抜けた、その時。

「じゃあ撮るよー。3、2、1・・・」

ふたたび拓斗が顔を寄せ、

ほんの一瞬、頬が触れた、気がした。

パシャ、と光るフラッシュ。

すぐに離れていく、頬と、手。

「サンキュ。」

そういつて肩に回された手はすりと離れ、彼はカメラマンをしてくれたクラスメイトからカメラを受け取った。

彼が離れるとともに、驚きと混乱が一気に押し寄せる。

今、頬が触れた？

「はい。」  
わたしのカメラも受け取ってくれた拓斗が、わたしのカメラを渡してくれる。  
渡してくれる拓斗の表情はいつもと変わらずにこやかで。

きっと、頬が触れたのも単なる偶然。  
そのときのわたしは、動揺した表情をみせないようにするのに必死だった。

留学してから写真を撮るときに自然と肩を組むことが多くなって、触れることには慣れてきたはずなのに。  
そこに何の意味もないとわかっているのに。  
回された手が嬉しかったのは、  
離れていった頬が寂しかったのは。  
その理由に、わたしはずっと前から気づいていた。

### 3 (後書き)

ちょっと今回は短いですね。

でもこの小説は3話完結ではありません。  
珍しく……。

いったん解散することになり、次に行きたい人は行き、帰りたい人は帰ってよいことになった。

拓斗はすっかりクラスメイトに肩を組まれているので、きっと次に行くだろう。

「サヤは次、どうするの？」

マリアが尋ねる。

「わたしはここで帰るね。これから荷物整理とかしなきゃいけないから。」

「了解、じゃ、帰国する前にはもう一回会おうね！」

「うん、じゃあまたね。」

そうしてマリアとすっかりハグして、次へ向かうクラスメイトと反対方向に歩き出した。

「沙夜。」

後ろから呼ぶ声に足を止める。

振り返る前から誰に呼ばれたかはわかる。

この声を聞き間違えることは、絶対に、ない。

振り返ると予想した通り拓斗が走ってきてわたしの前で足を止めた。

「沙夜、帰国するまでに時間ある？」

「うん、あるけど。」

「じゃあ、帰る前に飲みにいかない？」

喜びで気持がふわりと浮きあがる。

誘われるとは思っていなくて驚いたけど、返事を返すのに要した時

間はほんの一瞬だった。

「うん、いいよ。」

「いつなら空いてる？」

「んーっとね・・・帰国する2日前ならゆっくり時間あるけど、どう？」

「俺は平気。時間は？」

「じゃあ18時ごろでどう？学校待ち合わせで。」

「OK、じゃあそのときに、また。」

「またね。」

ふたたびきびすを返してクラスメイトのほうへ走って戻って行く拓斗の背中を見ながら、もうすぐ別れの時間が来ることはわかっている。でも、もう一度会えるということに心が浮き立ち始めた自分がいた。

2年間も留学生活を送っていると、意外に私物は増えている。

来るときはスーツケース1つで来たはずなのに、今ではそれをはるかに上回る量となっていた。捨てたり要らないものを人に譲ったりしてなるべく最低限のものだけ持ち帰るようにしたが、それでも荷物は段ボール3箱分にもなった。業者に家までとりに来てもらって日本へ送る手配をして一息ついた後、家族や友達にあげるためのおみやげを探しに買い物に出ることにした。

おみやげは食べ物がいいかな、それとも何かアクセサリーがいいかな、と考えながらのんびり歩いていたところで、ふとある店のショーウィンドウに目がとまった。

薄いピンクのティアドワンピース。

5段のフレアがついていて、裾のほうに下がるにしたがって桜色のグラデーションがだんだん濃くなっていく。

かわいいなあ、とワンピースの前で足を止めてショーウィンドウを見つめた。

留学中は正直言ってお金がないので、あまりいい服を着ていないし新しい服もほとんど買わなかった。

だけど、おしゃれしたくなかったわけじゃなかった。

ピンクという色も日本にいたら気恥ずかしくてまず買わない色。

だけど最後だし、留学の思い出に思い切って買ってもいいんじゃないだろうか。

相手はふだんのわたしのゆるーい服装だって、課題提出前のグロッキーな様子だって、あまつさえすっぴんだって知っている。

だからどんなに綺麗に着飾っても意味がないのかもしれないけど。

女の子は、好きな人の前では少しでも綺麗でいたいのだ。

最後に記憶した自分の姿がいつまでも綺麗なままであってほしい。

よし、と気合を入れてお店に入り、店員さんに声をかける。

「すみません、外に飾ってあるワンピース、あれ試着したいんですけどいいですか？」

ひとこと断りを入れてから試着室でワンピースを着て、鏡を見てみる。

うん、悪くない。

肩幅もOKだし、長さもちょうど膝丈。ピンクでも少し落ち着いた桜色のせいか思ったより派手ではないし、シルエツトもいい。

すると店員さんがミュールを持ってきてくれて、履いて全身を映してみるように勧めてくれた。

5cmくらいの高さがあるヒールの、大人っぽいゴールドのミュール。

この組み合わせがほんとにぴったりで、おまけに履いた時のふくらはぎのかたちがとっても綺麗に見える。

値段を見るとやはりそれなりの値段がするけれど、思い切ってミューールも一緒に買うことにした。

そうして自分で自分に魔法をかけて。

最後にちゃんと気持ちを伝えて、この恋を終わりにしよう。

そんな決意のもと、手に入れたワンピースとミューールを手にかへ戻った。

そして、帰国2日前。

約束の日。

いつもより早くから出掛ける準備を始め、丁寧に化粧をして、髪をいじる。

ワンピースにあうように何度か変えてみて、ハーフアップに落ち着いた。

支度が出来上がったところで時計を見ると、まだ待ち合わせには時間がある。

けれどなんだかそわそわして家でじっと待っていることもできず、家を出て待ち合わせ場所の大学へ行くことにした。

家から大学までは電車で20分。

2年間毎日見てきた景色だけど、もうすぐ見なくなると思うと少し感慨深い。

拓斗の家はわたしとは真反対。

わたしの家は大学から見て西側にあるけれど、彼の家は東側にある。彼の家のほうが大学には近く、彼はいつも大学に自転車に通学していた。

大学が待ち合わせ場所になるのは、大学の近くに一番お店が集まっているからだ。

お互いの家の周りには外食するような店がない。

大学の前に着くと、拓斗の姿はまだなかった。

待ち合わせの時間まで、あと15分。

待つ間、ぼんやりとこの2年を振り返ってみることにした。

拓斗に惹かれ始めたのはいったいいつからだっただろう。

拓斗の周りには人が集まる。

彼の友達づくりのうまさは天才的だと思う。

彼の知り合いは年齢や性別、国籍を超えてほんとに多くて、初めて会った人でもすぐに意気投合して仲良くなってしまう。

自然に相手との共通点を見つけて話を盛り上げ、いつのまにか心をつかむ。それは、いつも見ていてとても眩しくて、羨ましい気持ちになる。

彼にはイギリス在住の日本人の友達も多く、何度か紹介してもらったりパーティーと一緒に誘ってもらったりしたこともあった。

男の子の友達も女の子の友達も多くて、それが彼の人間としての魅力を表しているような気がした。

ただ、当初は拓斗に恋をするとは思ってもみなかった。

相手のいる人に恋をするなんて不毛だと思っていたから、彼女がいる人はたいてい最初から恋愛の対象からははずしてしまう癖があった。

それは、ある意味自分に自信がないことの表れだったのかもしれない。

拓斗には将来が半ば決まりそうな相手がいるのを初めから知っていたから、なおさら好きになるはずなんてないと思っていた。それなのに。

いつの間にか、落ちてしまったのだ。

時計を見ると、ちょうど待ち合わせの時間になった。

顔を上げると東の通りから彼が歩いてくるのが見えた。

普段のようにTシャツにジーパン。

だけど今日はその上に一枚ジャケットを羽織っている。

それだけでちよつと雰囲気が違うことに鼓動が反応して、ほんと、どれだけ彼のことが好きなんだろう、と自分に苦笑した。

歩いていた彼は途中でわたしに気づいたらしく、走ってきてくれた。

「ごめん、待たせたよね。」

ほんの少し、彼の息が上がっている。

「ううん、遅れてないよ。時間ぴったり。」

そういうと拓斗はちらりと自分の腕時計を確認して、ほつとした顔をした。

「じゃあ、行こうか。どっか行きたいところある？」

「特にないよ。」

「じゃ、最後まで変わり映えしないけど、いつものコースで行く？」

「うん、異議なし。」

そうして二人で肩を並べて歩き出した。

こうして二人で並んで歩く時間が幸せで、ひとり幸せをかみしめた。

いつものコースというのは、夕飯を軽く食べてからパブでならなら飲む、ただそれだけだ。

行く店は毎回変わるけれど、このコースは外れない。

今日も夕飯を食べた後にパブに向かっていた。

中に入ると人は意外とまばらで、ソファー席が空いていた。

基本的にはカウンターでもどこでも構わない二人だけど、せつかく空いてるならとそちらに座ることにした。

「沙夜は何飲む？」

「わたしはハイネケンかな。」

「・・・最後までオランダビールかい。」

「いいじゃん、好きなんだから。」

「いや、いいけどね。」

バッグから財布を出して立とうとすると、拓斗がそれを制した。

「いいよ、座ってて。俺が買ってくる。」

言うと、わたしの返事を聞く前にバーカウンターに歩いて行く。

こういう自然な気遣いができるのが彼なんだよなあ、と思う。

それはわたしが相手じゃなくてもそうなんだろうけど、こういうちよっとした優しさに気持ちが揺れる。

すぐにビールグラスを両手に持った拓斗が戻ってきて、向かいのソファに座る。

「はい、これ。」

ことん、と前にグラスが置かれる。

「ありがと。」

置かれたグラスを手に取り、さりげなく彼が持っていた位置に手を触れる。

そんなことをしても彼の手のぬくもりなんて残っていないことはわかっているけれど。

「じゃ、コース終了ってことで、乾杯。」

「Cheers!」

ちよっとグラスを上げて、かちん、とグラスを合わせて口に運んだ。向いの彼はくつとグラスを傾けて喉に流しいれ、幸せそうにグラスを置いた。

「ほんっと、おいしそうにビール飲むよね。」

言うと、拓斗が笑う。

「だって、おいしいから。それにさ、2年間すごい苦労してきたんだけどかやり遂げたんだから、テンションあがないほづがおかしくない?」

「まあね、それはわかる。」

「な？」

こんな、屈託のない笑顔も好きだなあと思う。

一緒に注文しておいたのかチップスが運ばれてきて、まだ熱そうなそれを嬉しそうにほおばりだした。見ているこっちも、なんだか幸せになる。

「で、結局拓斗は何のビールを頼んだの？」

「俺？」

「うん。」

「・・・名前忘れた。」

「どこの？」

「ベルギー。」

「・・・拓斗だって最後までベルギービールじゃん。」

「いいじゃん、好きなんだから。」

さっきのわたしと同じ台詞を言った拓斗に、ふたりして笑う。

「ところでさ、拓斗はどこに旅行に行くの？」

「ヨーロッパ。2週間くらいかけて回ろうと思って。」

「いいなー。超うらやましー。」

「いいだろー。」

拓斗はチップスに甘辛いチリソースとサワークリームをたっぷりつけて口に運んだ。

「このチップスの味も、日本に帰ったら恋しくなるんだろうね。」  
言って、自分も同じように口に運ぶ。

「あー、絶対恋しくなるな。あと、このビールも。」

「ビールはベルギーじゃん。」

「ま、いいんだよ。わざわざイギリスで飲むってというのがいいんだから。」

「んー・・・まあそういうことにしておいてもいいけど。あ、もうグラス空じゃん。次いつたら？」

気がつくとも拓斗のグラスは空になっている。

対してわたしのグラスにはまだ半分ほどビールが残っている。

いつも拓斗は最初はペースが速く、だんだん遅くなる。

反対にわたしは一定のペースで飲み続けるほうだ。

「じゃあ次いくわ。沙夜はどうする？」

「瞬考えて、財布からお金を出した。」

「一緒にお願いしてもいい？」

「了解。」

わたしの手からずりりと抜ける紙幣。

拓斗はお金を受け取って、わたしの分も注文しに行ってくれた。

## 5 (後書き)

推敲してたら遅くなりました。。。。

拓斗との関係は、Evenでありたいと思っている。

一方的に依存するだけではなくて、支えあうような。

だから同じ立場で彼とディスカッションができることが楽しかったし、ほかの日本人の女の子と違って学問的なことを対等に話合えるのは自分だけだという優越感は少なからずあったと思う。

対等でいたいから、食事の支払いもちゃんと半分に割るようしてきた。

会計は必ず彼にまとめてもらうけれど。

でも、はたして、本当の意味でわたしと拓斗は対等なんだろうか。

徐々に徐々に、わたしは精神的に拓斗に依存するようになったんじゃないだろうか。

あるとき、わたしはチューター（先生）との相性が悪く、中間評価で「このままではパスはあげられない」と言われた。

その後もチューターとはことごとく意見が食い違っし、何が自分の問題点なのかさっぱりわからず、だんだん精神的に落ち込んでいった。

そして最終評価が迫ったある日、一本の電話がかかってきた。

拓斗からだった。

『あんまり調子よくなさそうだけど、大丈夫？』

その言葉に、ふっと気持ちが緩んだ。

彼は別のチューターについているので、わたしの状況を直接知っているわけではなかった。

他のクラスメイトからわたしの状況を聞いて、心配して電話をくれ

たようだった。

『明日授業終わったら昼メシ一緒に食おう。』  
電話を切ったあと、その優しさに一人声をあげて泣いた。

翌日、約束した通りに一緒にお昼ご飯を食べに行き、そこで彼はわたしの話を聞いてくれた。  
今どろいという状態で、どうすればいいかわからなくなっているということ。

どうすればチューターが納得する答えを出せるのか、どういう切り口でいけばいいのか、一緒に考えてくれて、アドバイスくれた。  
彼自身も大変なのにわざわざ時間を割いてくれて、おまけにお昼は拓斗がおごってくれて、

『じゃあ、無事にパスしたら沙夜がおごって。』  
と、笑って言ったのだ。

その後、彼のアドバイスもあってなんとかチューターからパスをもらうことができた。

きっとあのとき彼の助けがなかったら、パスできなかっただろう。  
そしてその時には、いっそう彼のことが好きになっていた。

「あのときは、ほんとありがとね。」

まっすぐ彼の顔を見て言うのが恥ずかしくて、手元のビールグラスに視線を落としながら言った。

「ん？」

「ほら、わたしが単位落としそうだったとき。」

「あー、沙夜が半端なくグロッキーだったときね。」

顔を上げると、ちょうど拓斗がビールグラスを机に置いてこちらに

視線を向けた。

その視線がまるで、たいしたことないよ、と言っているように優しくて、さりげなく視線をそらしてしまった。

「あのとき助けてもらわなかったら、きつと無事に終わることなんてできなかつたと思うから。」

「いや、ほんと俺たいしたことしてないよ。それにさ、その借りなら十分すぎるほど返してもらってると思うし。ほら、あのあと俺がくたばりそうになったじゃん？」

そう言った拓斗は目を細めて笑った。

その言葉に思い当てることがあり、自然と拓斗を見つめる。

「1カ月前くらいのこと？」

「そ。あん時はさー、ほんとやばかった。こっちこそ助かったよ。まじで潰れかけてたから。」

思い出したのか、ふふつと拓斗が笑う。

拓斗がいう「あの時」とは、コースが終わる約1か月前で、課題の提出期限が一番重なっている忙しい時期だった。

加えて拓斗がその時についていたチューターは、拓斗のことを気にいって、それがゆえか彼にはかなり容赦なかった。

数個のうちのひとつの課題を提出し終えた金曜日、彼の顔色は見るからに悪く、クラスメイトのだれもが彼の調子の悪さに気づいき、心配した。

その時すでに彼への思いを自覚していたわたしは、思い切った行動にでる。

『拓斗、ほら、帰るよ。』

あとから考えてもずいぶんと思いきった行動だったと思う。

半ばぐつたりな拓斗を彼の家に連れて帰り、体温計で熱を計ると38度を指していた。

薬を飲ませて寝せ、それから食材を買いに行つて食事を作り、彼が起きるまでそばで勉強していた。

寝ている拓斗の顔を見るのも、こんなに近くで拓斗の顔を見るのも初めてだった。

そつと彼の額に手を当てると、ずいぶん高い熱が伝わってくる。そのまま頬にも手を滑らせ、触れる。苦しそうな顔に、胸が切なくなつた。

そしていつの間にか、頬に涙の跡があるのに気付いた。どんなに辛い夢を見たのだろうか。

ちょうど拓斗が家をシェアをしていた相手が不在だったこともあってそのまま拓斗の家に泊まることにした。

もちろん普段なら付き合つてない男性と一緒に夜を過ごすことなんてしない。

けれどその時の拓斗は本当につらそうで一人にしておくのが心配だから、そんな風に自分の中で理由をつけて拓斗のそばにすることにした。

ただ、そばにいたかった。

そのための正当な理由がほしかった。

次の日の土曜日はまだぼんやりしていたが食事はきちんと食べることができ、日曜の朝にはおだやかな顔で眠っていた。

それで、日曜の朝、拓斗がまだ眠っているうちに自分の家に帰ることにした。

作ったご飯の残りを冷蔵庫に入れてあるので温めて食べられること、それから早くよくなるといいね、ということ。

それだけ書いてテーブルの上に置き、荷物を持って外に出て鍵を閉め、小さく開けた格子窓の隙間から鍵を落として窓を閉じた、その時。

中からどたどたと、と足音がしてドアが急にバタン、と開いた。

「沙夜っ！！」

その剣幕に一番驚いたのはわたしだった。

寝起きの彼はいろんな方向に髪が飛び跳ねてて、寝巻代わりのＴシャツとジャージで、裸足のままドアを開けてものすごくあわてた顔をしていた。

「どうしたの？」

問うと、「えつつと、あの、」と、急に拓斗の勢いがなくなる。

「外寒いんだからそんな恰好で出てきたらまたぶり返すよ。ほら、なか入る。」

言って彼を中に押し戻し、わたしも一旦部屋の中へと戻る。

「朝ごはん食べる？それとももう少し寝る？」

荷物を部屋に置き、彼に聞く。

「・・・ご飯食べて寝る。」

その答えに吹き出した。

「了解。じゃあちゃんと上着着てからそこに座ってね。」

吹き出したわたしに、拓斗はちよつとふてくされていた。

しっかり朝ごはんを食べた拓斗にふたたびベッドに入るように促すと、素直にベッドに横になった。

見上げる拓斗の顔が、なんだか幼い子供のように見えた。

「だいぶよくなったみたいだし、わたしは家に戻るね。」

「ほんと、いろいろありがとう。」

なんとなく、ちよつと寂しそうな顔に後ろ髪がひかれる。

「じゃあ沙夜お母さんは自分の仕事に戻るわ。」

おどけて言っつて、彼の額に手を当てる。熱はほとんど下がっているようだ。

彼の額に当てていた手を離すと、拓斗がその手をつかんでベッドか

ら起き上がった。

なぜそうしたのかはわからない。

けれどわたしはその時、拓斗を軽く抱きしめた。

まるで、母親が子供を落ち着かせるみたいに。

とんとん、と、その背を叩く。

「大丈夫。もう少し休めばまた元気になるから。みんな待ってるよ。」

「

・・・ありがとう。」

そう言っ、背中にまわされた手がきゅっとしめられる。

高い体温に包まれながら、ゆっくり背をさすっていた。

きつとあのとき恥ずかしくなかったのは、完全に母親に徹していたからじゃないだろうか。

小さな子供を守る母親。

でなければ、抱きしめて、抱きしめられて平気なままではいられない。

「でもさ、コースが始まった頃は2年後の今なんて全く想像できなかったけど、来年の今頃はどうしてるんだろうね。」

よくよく思い出すと恥ずかしくなってきた、話題を別のところに入る。

「そうだなー。仕事、してるんだろうなあ。」

「また就活しなきゃだね。」

「あー、面倒だなー。」

二人とも大学卒業後しばらく社会人として過ごし、それから大学院に入った。

できれば大学院での勉強が生かせる仕事に就きたいけれど、今のこ

時世仕事自体がみつかるかどうかが問題だ。

「帰ってきたら九州で仕事探すんでしょ。」

拓斗の彼女は九州にいる。

だから帰国したら彼女と一緒に住めるように九州で仕事を探すって  
言っていた。

「あー、それはまだ白紙かなー。」

「えっ、どうして？彼女待ってるんでしょ？」

言うと拓斗はうつむいて、くいつとビールを煽った。

「次、持ってくる。」

空になったグラスを置いて席を立った拓斗を見て、なんだかあまり  
よくない予感がした。

## 6 (後書き)

ちょっと今回は長くなりましたが、きりがよいところまで。

戻ってきた拓斗の手には新しいグラスはない。

「どうしたの？」

立ったままの拓斗に聞く。

「やっぱさ、店変えていい？」

「うん、別にかまわないけど。」

突然の申し出に驚きながらも、残りのビールを飲み干してパブを出ることになった。

店を出て無言のまま拓斗は歩き出し、パブからほど近いバーへと入って行った。

ここは内装がとてもおしゃれで出されるお酒もおいしいけど、その分料金も割高なのでほとんど来たことがない。

バーの隅のほうのカウンター席に二人並んで腰かけ、カクテルを注文する。

「何飲むか決まってる？」拓斗が聞く。

「わたしはカルーアミルクかな。」

「え、そんな甘いの飲むの？」

「そんな気分なの。」

雰囲気の良いバーでカルーアミルクとはなんともちぐはぐな気もするけれど、なんとなくそういう気分だった。

こっそり甘いのが飲みたくなった。

ほどなくしてふたりの前にひとつずつグラスが置かれる。

「Cheers」

二度目の乾杯をして、そっと口をつけた。

濃い甘さが口に広がる。

拓斗はしゃべらずに、物思いにふけっているようだった。

暖かい、橙色の照明に右側にいる拓斗の横顔が照らされる。そのまま、その静寂を邪魔せずにカルーアを口に含んだ。

「マルガリータを。」

空になったカルーアミルクのグラスを下げてもらい、あたらしく注文する。

だんだんとわたしの飲むペースのほうが早くなってくる頃だ。

「マルガリータ、か。」

沈黙していた拓斗が、ぽつりと口を開いた。

「ドライマティーニを。それとチーズの盛り合わせも。」

頼んだ彼の横顔は、なんだか悲しげだった。

「別れたんだ。」

彼が切り出したのは、ちょうどわたしの頼んだマルガリータが目の前に置かれたときだった。

「えっ？」

「彼女と、別れた。」

「……はあっ？」

思わぬ告白に変な声が出る。

「それっていつのこと？」

「ひと月くらい前、かな。」

「もうすぐ帰るっていうのに。なんで？っていうか、ひと月前って、」

「……うん、あの時。」

そう言っただけで口をつぐんだ彼に、頭が真っ白になった。

ひと月前。ちょうど彼がつぶれてた、あの時。

課題のストレスだけじゃなくて、精神的にも落ち込んで、それで潰れてしまったのか

「ここまで頑張ってきたのに？どうして今になってなの？」  
「な。なんでだろうな。でもやっぱり俺が悪いんだと思う。課題で忙しかったりするとあんまり連絡とらなかつたし、だいぶ寂しい思いもさせた。」  
自嘲するようにグラスを煽る彼に、胸が痛くなる。

「そんなの彼女もわかってたはずじゃない。わかってて、帰りを待たせて言ってくれたんじゃないの？拓斗が一生懸命頑張ってきたことはみんなが知ってる。わたしも知ってる。」

「でも、彼女が一番つらい時にそばにいてやれなかつた。彼女にとっても限界だつたんだと思う。それだけ、離れた時間も、距離も大きかつた。」

それでも、そんなの無いって思う。  
彼女も辛かつたかもしれない。寂しかつたかもしれない。  
でも拓斗だつて日本を離れて彼女とも遠く離れて寂しかつたはずだし、待っていると言つた彼女のもとへ戻ることを励みに苦しい時間を乗り越えてきたのに。

しかも、もう少しで帰国するっていうあの時期に。  
辛いのは拓斗のはずなのに、わたしの胸も苦しい。

もう一度同じものを、と彼がバーテンダーに頼む。  
ペースが上がってる。

それが彼の苦しさを表しているような気がした。  
でも、今のわたしは、慰める言葉をもたない。  
二人にしかわからないことがある。  
だから安易な慰めの言葉を使つてはいけないような気がした。

「辛かつたね。それなのに最後までよく頑張つたね。」  
言えたのはそれだけだつた。

その精神状態でがんばり通す大変さは、わたしでもわかるから。ぼつり、とカウンターに涙のしずくが落ちたのが見えた。うつむく拓斗からそっと視線をそらす。

そして、思う。

今の拓斗には自分の思いを告げるべきではない。

こんなときに言うなんて、とてもできそうになかった。

永遠に、封印してしまうしかないかな。

天井を仰いで、そっと息を吐いた。

## 7 (後書き)

区切りが悪いので今回はちょっと短めです。

もう一度彼を見たときには、もう涙は止まっているようだった。

そのまま二人とも静かにグラスを重ね、長い時間をバーで過ごした。わたしは電車の時間があるので、最終電車に間に合うように余裕をもって店を出ることにした。

「ここでいいよ。今日はだいぶ飲んだから酔ってるでしょ。」

「いいや、駅まで送って行くよ。」

「だって、家と反対方向になるでしょ。すぐそこだし、大丈夫だよ。」

「すぐそこでもちゃんと駅までくらい送るよ。沙夜は女の子なんだから。」

「・・・ありがとう。」

いつもどんなときでも、拓斗はちゃんと駅まで送ってくれる。

毎回毎回、その優しい言葉に胸がきゅゅっとなる。

その優しさもこれが最後になると思うと、すごく切ない。

でも、少しでも彼といられる時間が延びたことは、素直に嬉しい。もうすぐ別れの時がくるから。

だいぶ飲んだはずだけど、拓斗の足取りはまだしっかりしていた。いつもよりはゆっくりだけど、確実に駅へは近づいていく。拓斗も少しは、わたしとの別れを寂しいと思ってくれているんだろうか。

思わず、足を止めなくなる衝動に駆られて、やめる。

ほんのちよつと足を止めたところで、何も変わりはない。

今ここで想いを告げても、彼の傷ついた心には届きはしない。

それなら最後まで涙を見せないで、せめて笑顔で別れよう。

歴史のある駅舎が見え、改札の前で立ち止まる。

深呼吸をして心を決め、向かい合うようにして拓斗の前に立った。

「じゃあ、気をつけてね。」

「沙夜も、気をつけて。」

ここであっこのいい女性なら、彼に笑顔に向けて颯爽と改札をくぐっていくのだろう。

でも、これが最後。

そう思うと、すぐ拓斗に背をむけて歩き出すのはすぐためらわれた。

彼の表情に少しでも、名残惜しいという想いが現れていないか探してみたけれど、拓斗の表情はいつも通りの笑顔で、また明日学校で会う、まるでそんな感じに見えた。

そんなもんだよね、と内心苦笑した。

そんなに期待してたわけじゃないけど、予想通りだとやっぱり悲しい。

でもそれが彼の中での自分の位置。

留学先で出会った人のひとり。それだけ。

きつと日本に帰ればまた新しい友達がたくさんできて、それこそ今のわたしのように専門分野について話ができる女の子の友達なんてすぐにできて、わたしという存在は彼の中から自然に消えていく。わかってる。

けれど、わたしにとっての拓斗はもつともつと大きな存在で、そんなに簡単に忘れられないと思う。

だからこそ、彼にも少しでも長く自分のことを覚えていてほしい、そう思ってしまう。

こんなのは自分のエゴだからかっこわるいのかもしいけど、  
少しでも憶えていてもらうために、  
わたしがいつかちゃんと、彼を忘れられるように。

最後に、勇気が欲しい。

腕を左右に開き、拓斗に向かって歩く。

一瞬、驚いた顔が見える。

そのまま、開いた腕を前にのばして、

拓斗の背中に回した。

別れの、ハグ。

だから、きつく抱きしめたりは、しない。

背中を軽く、たたく。

「2年間、拓斗と一緒によかった。ありがとう。」

言って、するりと手を離し、拓斗から離れる。

「じゃあね！」

後ろ歩きをしながら笑顔で手を振って、改札を抜けた。

拓斗がどんな顔をしてるなんて見る余裕は残ってなかった。

拓斗の姿が見えなくなったところで耐えきれず、涙がこぼれた。

電車の中ではなんとか涙をぬぐったけれど、家に帰り着いた途端、  
涙がとまらず声をあげて泣いた。  
これがわたしの精一杯だった。

## 8 (後書き)

次から拓斗編を少しだけ挟みます。

## 9 (前書き)

ここから拓斗編です

「まじかよ……。」  
つぶやいたのは誰に対してでもない。

体の奥から湧き上がるような熱を感じた、自分自身に対してだった。

香月沙夜かづき さやは、ちょっとシャイでおとなしめの、同じ日本出身の女の子だ。

彼女は英語が苦手というよりも会話自体が苦手らしく、自分とは違いなかなかクラスメイトと仲良くなれないようだった。

そんな彼女を見かねて、最初のころは自分の知り合いにも会わせたり、みんなでご飯を食べたり遊んだりするときには必ず誘ったりしていた。

自分自身は初対面の人とでも初日で仲良くなれる上に、幼いころに父親の仕事の都合でカナダに住んでいたことがあり、そのため日常生活レベルの英語は不自由ない程度に習得できていた。

だから自分の中では沙夜は性格的な面でも言葉の面でもフォローしてやる対象だった。

面白いことに、言葉少なな彼女が一番嬉々として話すのは勉強に関することだった。

専門の話になると、とたんに目が輝いて饒舌になる。

沙夜は穏やかだけど自分の意見をしっかりと持っている、芯のある女性だった。

最初のうちは、海外生活に不慣れな彼女を気遣ってあげているつもりだった。

しかしいつのまにかそれは逆になっていたような気がする。

彼女は目が合えば微笑んでくれて、朝会えば「おはよう」と声をか

けてくれて、苦しくなるとよく愚痴を聞いてくれた。  
気がつくといつもちゃんとして見守ってくれている、それでいてほっとする。  
いつの間にか彼女はそんな存在になっていた。

今から1か月前、3年付き合った彼女と別れた。

3年のうち2年は日本とイギリスの遠距離恋愛だった。  
イギリスに渡る前、一度自分から別れを切り出した。

自分も彼女も適齢期だし、おまけに自分の勝手で行くのに2年も彼女に待っているとは言えなかった。

それでも待つ、と彼女が言ったとき、実はものすごく胸を打たれた。  
だからその時、俺は帰国したら彼女と結婚しよう、そう心に決めた。

最初の一年はよかったように思う。

今の時代メールもチャットも、インターネット電話だってかけられる。

つながる方法はいくらでもある。

ただ、次の一年は正直なかなか連絡をとることができなかった。

課題の量がものすごく多くなったため常に提出期限に追われ、学校が終わった後は夜遅くまで調べものとレポートの作成。

しゃべっている余裕がなくなった。

メールの返事も遅れるようになった。

チャットにもつながらなくなった。

さらに指導教官がかなりの理論派だったのも災いした。

理論の穴を徹底的に突かれ続け、埋めても埋めても次の矛盾点を指摘され、精神的に追い詰められていった。

そんな状況の中、彼女からメールが届いた。

『もう無理。別れよう。』

文字を見ても何がなんだかわけのわからないまま、彼女と話をしなければという想いが働いてすぐに彼女に電話をかけた。すると、

『別れるって言ったらずくに電話くれるんだね。』  
そう言っつて、悲しそうに笑った。

そこで初めて俺は事態の深刻さに気がついた。

『ほんとに悪い。寂しい想いばかりさせてる。でも、あと1カ月で帰るから。ここまで来たからあともう少しだけ待ってくれないか？』

文字通り「懇願」だったと思う。  
でもそれは、彼女の涙声で断られた。

『大丈夫だつて思ったけど、ここまで頑張つて来たけど、やっぱりもう無理だよ！一番つらいときにタクはいない。一番声を聞きたいときにそばにいない。もう、ひとりじゃ頑張れないよ……。』

受話器の向こうで泣き喚いた彼女に、言葉を失った。  
確かに俺が悪い。

簡単に会える距離ではないからこそ、不安や寂しさを取り除くためにはもつともつと頻繁に連絡をとらなきゃいけなかった。

それを怠ったのは俺自身だから。

彼女との別れを簡単に了承できたわけではなかった。

ただ、彼女も俺自身もそのことをそれ以上じっくり話す気持ちの余裕はなく、とりあえず距離を置く、そんな結論になった。

今でもイギリスと日本で連絡もそれほどとれていないからこれ以上の距離なんてとれるはずもないのに、よほどお互い余裕がなかったんだと今考えると思う。

そうしていったん彼女の問題を棚上げにしたあとでなんとか課題を

仕上げ、期日ぎりぎりにチューターにOKをもらって提出したその日。

朝から顔を合わせるクラスメイトクラスメイトみんなに「顔色悪いよ」と言われていた。

そのときは少し頭が痛いしぼんやりするかも、くらいにしか思っていなかったし、それは寝不足からくるものだろうと思っていた。

家に帰って寝れば治るだろうと思い、帰る前に大学でメールをチエックすると。

『やっぱりこれ以上は無理。もどには戻れない。』

彼女からのメールを見た瞬間、俺の中の何かがぷつりと切れた。

## 9 (後書き)

もう一回、拓斗編が続きます。

俺自身体的にも精神的にも限界だったんだと思う。

『拓斗、ほら、帰るよ。』

気づいたら沙夜に腕を取られ、家に帰ってベッドに寝かされていた。いつの間にか入れられていた体温計は38度を指している。

そりゃぼーっとするし頭も痛いわな、と自分で納得したところで、うつらうつらと眠りに落ちていった。

夢の中でも彼女の言葉が何度も繰り返された。

どんなに苦しくても熱のせいか目は醒めず、まどろみの中で彼女に責められる。

じゃあ俺はどうすればよかった？

そもそも俺が別れようって言ったときに別ればよかったんじゃないか？

寂しい想いをさせるって言ったはずだよな？

それでも待つって言ったのはあいつじゃないか。

そもそも頻繁に連絡をとっていたら本当に別れずにすんだのか？

これはほんとに俺だけのせいかな？

ぐるぐるぐるぐる気持ち悪いほど同じことが頭の中をめぐる。

こんな苦しい思いばかりならイギリスに留学するんじゃないか？

そのとき、少しひんやりしたものが額に触れた。

ああ、誰かの手だ。誰かがそばにいてくれている。

それで不思議と落ち着いて、無限の思考のループから抜け出すことができた。

時折目を覚ますと、かならずそこに沙夜の姿があった。時には食事を作る後ろ姿だったり、パソコンに向かう横顔だったり、ベッドのすぐそばで本を読む姿だったり。それにひどく安心して、最近の寝不足をすべて取り戻すかのようにぐっすりと眠り続けた。

だから。

目が覚めたときに沙夜の姿がなかった日曜日の朝。

かしゅん、と鍵が落とされたことに気づいた瞬間に布団を跳ねのけ、玄関へダッシュして扉を開けていた。

『沙夜っ！』

ドアを開けるとすぐそこに沙夜の姿があった。

「どうしたの？」

不思議そうに問われて、はっと我に返る。

「えっつと、あの、」

自分でも理由をうまく説明できなかった。

ただ、瞬間的に「行ってしまっ」と強く思っただけだった。ただ、瞬間的に「行ってしまっ」と強く思っただけだった。

怖かった、たぶんそれが一番ぴったりくる表現だと思う。

『外寒いんだからそんな恰好で出てきたらまたぶり返すよ。ほら、なか入る。』

そう言っただけで一緒に中に入ってきた沙夜の姿に、ものすごい安堵感を覚える。

「朝ごはん食べる？それとももう少し寝る？」

いつものように微笑みながら聞く沙夜に

「・・・ご飯食べて寝る。」

と言うと、彼女が吹き出した。

朝ごはんを食べ後ふたたびベッドに入るように促され、横になったもののなんとなく不安になった。

「じゃあ沙夜お母さんは自分の仕事に戻るわ。」

おどけて言った彼女は俺の額に手を当てた。

これ以上彼女を拘束すべきでないことも、自分にその資格がないこともわかつている。

彼女も課題を仕上げなければならぬからここがリミットだということも。

わかつてはいるものの、風邪をひいたときの子供のように、行くなと駄々をこねそうな自分がいた。

それで不安の正体をはっきり悟った。

ひとりになるのが、寂しい。

気づいた時にはもう、額から離れていく沙夜の手を追うようにつかみ、ベッドから起き上がっていた。

するじ。

沙夜が両手を背中に回してふうわりと抱きしめた。

『大丈夫。もう少し休めばまた元気になるから。みんな待ってるよ。』

何も言わないけれど、まるでそう言って安心させるように、とんとんと背中を叩いてくれる。

そんな風にあやされるのが嫌ではなくて、自分も沙夜の背中に手を

回した。

「・・・ありがとう。」  
きゅっと沙夜を抱きしめる。

沙夜は胸の中にすっぽりと収まっているのに、なんだか自分が包まれているような気持ちになった。

こんなふうにして、俺は沙夜に助けられてきた。

でもこうして思い返してみても初めて気づいたことがある。

彼女は元来シャイで、自分の気持ちを伝えるのも苦手だけれど、ボデイタッチもおそらく苦手なほうだと思う。

外国人は基本的に距離が近いので、この2年間で「体の一部が触れる」ということに慣れてきたとは思う。

けれど、彼女から「触れる」のはほとんど見たことがなかった。

ましてや「抱きしめる」なんて行動を彼女から起こすなんてますます想像しがたい。

けれどあの時は、その行動に不自然さなんて全くなくて、

そのあとはまた、いつも通りの距離を保つ沙夜に戻っていたから、

あの時包んでくれたのが沙夜だったっていうことをどこかきちんと認識しないまま、

そこにある意味や、それが沙夜だったことの大きさ、

それらを「彼女の優しさ」という簡単な言葉でひとくくりにして、さして考えることなく病気の記憶に放り込んでしまっていた。

あの時いっただい沙夜は、どんな気持ちで抱きしめていてくれたいたんだろう。

人にとっても気を使う性格の彼女が、

学問以外のことであれば、言いたいことも言わずに抑えてしまう彼女が、

そしてどんなに辛くてもうまく人に頼れない不器用な性格の彼女が、

そしていつたいどんな気持ちで、

このあいだ、別れ際にハグしてくれたんだろう。

おとなしい彼女が自分からハグしてくれたのも、

『2年間、拓斗と一緒によかった。ありがとう。』 耳元でささやかれた言葉も、

そしてあの日自分のためにおしゃれして来てくれたことも、ほんとは全部、彼女の心の声を全部表していたのに。

ハグのために回された手がずりりと離れて距離ができ、見えた彼女の瞳に抑えきれなかった気持ちすべて出てしまうまで、

巧妙に隠されてきた彼女の気持ちにはまるで気付けなかった。

逸らされる前に見えた瞳は少し切なげで、泣きそうで、

それでいて、まるで別れがイヤだと精一杯叫んでいるようだった。

笑顔で手を振っても、その気持ちが笑顔に完全に覆いつくされることはなくて。

「最後まで沙夜に会い遣わせっぱなしかよ・・・。」

沙夜が消えていった改札の前で頭をかかえてしゃがみこむ。

しばらくそこにうずくまったあと、のろのろと立ち上がり、

自転車をおして静かな町を歩いて家に帰った。

まだ荷造りも始めていない部屋の中、電気もつけずただベッドに腰掛ける。

そのとき、着信を告げるメロディーが部屋に響きわたった。

## 10 (後書き)

なかなか時間がなくて、投稿が遅くなりました。  
次からまた、沙夜編に戻る予定です。

帰国当日。

マリアのイギリス人の彼氏が車を持っていて空港まで送ってくれるというのに甘えて、乗せていってもらうことにした。

空港の中まで来て見送ってくれる、と言ってくれたけど、中まで来てもらうのもものすごく泣きそうな気がしたので、ターミナルの入り口で降りしてもらい、そこでマリアと別れることにした。

「ねえ、サヤ。」

スーツケースをトランクから出してもらったところで助手席からマリアが下りてきて、わたしの前に立った。

「なに？」

そう言いながら、マリアと向き合う。

そういえばこれで彼女の顔を見ることもしばらくないんだな、と思った。

「サヤはわたしが初めて友達になった日本人で、とっても努力家で、cuteな女の子だよ。」

「・・・ほめすぎだよ。」  
率直なほめ言葉に恥ずかしくなって言うと、マリアはうつん、と首をゆるく横にふった。

「ねえ、サヤ。もつと自信を持って。サヤはこんなにタフなコースを2年間もがんばってきて、その上ちゃんと修了できたんだよ。少なくともサヤは、日本でもトップにいるはずなの。だからもっと胸を張っていい。」

「・・・マリア。」

胸が、熱くなった。

この2年、本当に苦しかった。

そもそもの留学のきっかけは将来の不安だった。

みんなと同じような仕事しかできなければ、いつか自分は社会で淘汰されてしまうんじゃないか。

そうならないためには最新の知識と技術が欲しい。

だから、誰かのためじゃなく自分の不安を解消したいという、ただただ利己的な理由でここまでやってきたのだ。

専門的な知識と、それをこうして認めてくれる人がいること。

このふたつが、これから胸を張って生きていくために必要だったもので、ようやくそれを手に入れられた、そんな気がした。

「日本に帰ったらときどき近況を知らせてね。イギリスでの経験が生かせる職場がみつかるといいね。それから・・・」

そこで一旦、マリアは言葉を切り、こちらに近づいて小さな声で、

「Cuteなボーイフレンドができれば連絡するってこと、忘れないでね。」

そう言うと彼女は口元に人差し指を当てて、いたずらっ子のように笑った。

彼女の言葉に一瞬、2日前に会った拓斗の顔が頭をよぎり、ちくりと胸が痛んだ。

「I will」（そうする）

できるだけおどけて、そう返した。

するとマリアが腕を広げたので、わたしも腕を広げてマリアを迎え入れた。

「サヤ。」

「ん？」

マリアが、その細い腕できゅうつと抱きしめる。

「あなたは女の子としてもすごく魅力的なの。誰が否定しても、サヤ自身が否定しても、わたしはそれを知ってるから。ずっと友達だから、この先サヤが迷ったら時は何度でも言うよ。だから、自信持

って。」

何て返していいかわからなかった。

嬉しかったり寂しかったり悲しかったり感動したり、それがない交ぜになって言葉にならず、返事の代わりにマリアをぎゅっつと抱きしめた。

マリアはそっと、とんとんと背中を優しく叩いてくれて、わたしはそっと深呼吸してから腕を解き、彼女から身を離れた。

「ありがとう。マリアと友達になれてよかった。」

「わたしも。Keep in touchね。それで、必ずまた会おうね。」

その言葉に頷いて、スーツケースの持ち手に手をかける。

「じゃあ、またね。」

言って、空港入り口へと足を向ける。

すると、

「サヤ。」

聞こえた声に振り向くと、マリアが彼氏と並んで立ち、ふたりで親指を上立てている。

「Good luck!」

その光景になんとか笑いながら手を振り返し、空港へと足を踏み入れた。

マリアと別れた感傷にひたりながら、重いスーツケースを引き空港内を進む。

空港の高い天井を見上げながら、2年前に初めてこの空港に降り立

った時のことを思い出した。

2年前、この空港に降り立った時は海外旅行すら初めてだったので、空港内の手続きもわからなければここが本当に合ってるのか間違っているのかもわからず、日本語のない英語だらけの表示におろおろしながら歩いていった。

今はさすがにどこに向かうべきかわかっているから気持ち的にも堂々と歩くことができ、それが自分の成長のように思えてひとり嬉しくなった。

そしてチェックインカウンターでチェックインを済ませてスーツケースも預けてしまい、早々に身軽になった。

国際線に乗るので出国手続きのために税関を通らなければならないが、それでもまだ十分な時間がある。出国手続きのゲートを通ると店の数も少なくなるので、ぎりぎりまでゲートの手前のエリアで時間を潰すことにした。

とはいえ、物を買ってこれ以上荷物が増えるのも大変だし、ウィンドウショッピングしてもフライト前に疲れて足が浮腫むのも嫌なので、雑誌を買ってカフェで読むことにする。

書籍が売られているニュースエージェンシーで雑誌を買い、出国ゲートのすぐ隣にあるカフェに入ろうとした、その時だった。

「Excuse me, have you got the time?」（すみません、いま何時ですか？）

留学して当初驚いたのが、全く知らない通りすがりの人にこう言われることだった。

腕時計をしているのを見て、時間を聞いてくるらしい。

何度かこういうことがあってさすがに慣れてきたので、後ろからこう問いかけられたのに対し、落ち着いて、

「Sure...」

言いながら振り返った、その先に。

あり得ないものを見つけた。

「……………拓斗。」

いるはずのない彼が、そこにいた。  
いるはずがないのだ。

なぜなら、わたしは彼に出発時間も便名も教えていないからだ。  
拓斗と別れたあとに散々泣いて胸はじくじくと痛んでいたのに、驚  
きでそれらがすべて吹っ飛んでいた。

「……………なんで？」

茫然とするわたしに、拓斗は笑って言った。

「Do you have some time to have  
a cup of tea?」（お茶する時間ある？）

11 (後書き)

なかなか更新ができなくてすみません。。。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1675p/>

---

Short story 5

2011年6月26日10時41分発行